

# 東京バッハ合唱団 月報

[第519号] 2005年9月号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101 Tel: 03-3290-5731 Fax: 03-3290-5732  
E-mail: bachchortokyo@aol.com http://www2.tky3web.ne.jp/~bach/chor/

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No.519  
September 2005

5-17-21-101 Funabashi,  
Setagaya-ku, Tokyo

## 野尻湖合宿と神山教会演奏会、 初めての参加

藤田 正記(団員:バス)

私は、1日遅れの8月5日(金)午後の練習から合宿に参加しましたが、以下、野尻湖合宿と神山教会特別演奏会に初参加した体験を記録的に記して報告いたします。

### 練習

湖上のルビーホールにて、8月5日(金)14:00~16:00、佐々木まり子先生ご指導によりカンタータ第85番《われは善き牧人》、19:00~20:30、大村先生ご指導によりカンタータ第147番《心と日々のわざもて》、8月6日(土)9:00~12:00、大村先生ご指導により再度カンタータ85番を練習。ピアノ伴奏は内山亜希さん。

佐々木先生は、ご自身で直接指導されなかった時も講評され、カンタータ85番について、バス・アリアは「力みなく、柔らかく歌えています。われはよき牧人のメッセージがよく伝わってきます」、アルト・アリアは「大変むつかしいメリスマをよく歌えています。軽くつまみ上げるような感じで歌うともっとよいですね」、ソプラノ・コラールは「とてもきれい。音のポジションは、おへその上あたりに置き、言葉にスピードを」、テナー・アリアは「デュオの息ぴったり」、合唱コラールは「下3声は、ソプラノのコラール旋律をよく聴きながら唱いましょう」と、まず私達をほめてくださり、モチベーションを上げてから、ポイントを的確に指摘されました。

私達は、次第に4声のハーモニーを楽しみながら余裕を持って歌えるようになり、曲にメリハリが付き、輪郭がはっきりしてきたことを実感しました。そして、佐々木先生のアルト独唱カンタータ第54番《抗えいざ罪に》の練習を拝聴。いつもの定期演奏会では、次の出を意識して、少し緊張気味に聴いているのですが、ルビーホールでは遠景にヨットやボートが浮かび、湖面が白く輝いていて、リラックサして聴き入り、しばし至福の時を楽しみました。

### 団内ミニコンサート

8月5日(金)16:50~18:00。毎年、多彩な出演があるようですが、今年は格別なビッグ・コンサートになりました。7出演中、3賞の受賞者は次のとおりです。

1位:川合満里子(S)、橋本眞行(T)、室田悟(B)、内山亜希(P)、橋本詠詞で《コーヒー・カンタータ》(初演は松山)、全員の歌唱、演技、伴奏が群を抜き、文句なしの受賞。賞品:モテット全曲CD。

2位:室田千晶・悠介ピアノ連弾《世界でひとつだけの花》、室田悟(B)・千晶(P)カンタータ第78番《イエス わが心を》よりバス・アリア。室田さんの音楽に対する真摯な

態度と、ほほえましい音楽、一家全員で受賞。賞品:マニフィカトCD。

3位:平田輝子、大村健二のフルート二重奏。今後の精進により、世田谷中央教会での伴奏デビューが期待されての受賞。賞品:ヴァイオリン独奏パルティータCD。

### 神山教会特別演奏会

8月6日(土)午後、出発のバスの中で、森永さんより、国際村と神山教会の歴史、共同体「野尻湖協会」のルールについてレクチャーを受けました。緑豊かな山林と静かな湖の自然環境を厳格に守り、人工物を極力排し、利便性とスピードを優位としてきた私達日本人の一般的ライフスタイルとは全く逆の悠然としたスローライフに感嘆。

17:00 会場を設営し、ゲネプロが終わる頃になって、突然の夕立。パケツをひっくり返したような豪雨と刻々と迫る開演時間をにらみながら、ひたすら通り過ぎることを祈ると、開演19:00直前になってピタリと止み、神山教会は浄められました。指揮:大村恵美子先生、合唱:S=6名、A=10名、T=2名、B=8名、計26名、アルト独唱:佐々木まり子先生、ピアノ:内山亜希さん、受付:中澤富士子さん(後援会員、大村先生の高校時代からのお友達)、聴衆:50名余(外国人約6割、日本人約4割)。

プログラムは、前半はカンタータ第54番《抗えいざ罪に》(アルト独唱)カンタータ第85番《われは善き牧人》(斉唱+合唱)休憩を入れて、後半、カンタータ第169番《神にのみ わが心献げん》(アルト独唱+合唱コラール)カンタータ第147番《心と日々のわざもて》より冒頭合唱とコラール。最後のコラール イエス わが喜び を、ふたたび聴衆と一緒に合唱。

佐々木先生は、昨年、第35番と第170番を演奏されて、今年の2曲と合わせてアルト独唱のためのカンタータ全曲を歌われたこととなります。特に今年の2曲は大変な難曲で、アルトの音域としては第54番が大変低く、第169番は逆に大変高いのですが、佐々木先生は、温かな音色で、豊かに、朗々と歌われ、しかも、日本語がかくも美しく歌われるのかと感銘いたしました。聴衆の皆様もご満足の様子で、それがひしひしと伝わってきて、私達は感激し、胸が熱くなりました。

### アクティビティ

8月5日(金)夜、恒例の花火大会:童心にかえり、花火に歓声。

8月6日(土)早朝、テニス大会:加藤さん、森永さん、松尾さんと春樹君、友樹君、室田夫妻と悠介君、真由ちゃんと私の総勢10名。町営テニスコートで、ゲームというか、ボールを追っかけて右左。子供達は、大人達の合唱づけに飽き飽きし、ストレスがたまっていたので、走り廻る。私も、大学生、社会人とテニス合宿を続けてきましたが、このような早朝のテニスは久しぶり。



神山教会を湖畔側から望む(写真:松尾茂春)

8月7日(日)早朝、一人で、野尻湖一周サイクリング。神山教会 YMC A 東洋英和カトリック教会 宿舎(レイクサイドホテル)の

森林コースがアップダウンはあるもののすばらしい。杉木立より蝉時雨が降り注ぎ、耳の中で倍音となって響くのは、ハーモニーに集中し過ぎたせいでしょうか。カトリック教会の門脇に、アッシジの聖フランシスコが記した「平和の祈り」の碑文があり、何度も読み返す。朝食後、昨年の山田さんから引き継ぎ、手漕ぎボートに乗り、弁天島の宇賀神社に合宿と特別演奏会の無事終了を報告。

解散後、佐々木先生のご希望で、黒姫高原に19名でバス観光。黒姫児童館にて、ミヒアエル・エンデ、松谷みよ子の展示を見る。幼少の頃、絵本1冊もわくわくしながら見たことのない私にとって、あまりにもまぶし過ぎる夢のファンタジーの世界でした。高沢農園のそば処に寄り、地ビールの信濃エールで喉を潤し、高原野菜の天ぷらそばに一同ご満悦。昼食後は、100万本のコスモス園をパノラマリフトで望湖台まで空中散歩。

帰途、大村先生、中澤さんと一緒にバスを降り、一茶記念館に立ち寄り、江戸後期の俳人一茶の生涯を顧み、数々の名句を懐かしい思いで親しむ。あまりにも有名な「やせ蛙まけるな一茶是にあり」の「一茶」を「大村先生とバッハ合唱団」に置き換えてみるとどうでしょうか。43年前、わが国ではまだバッハの教会カンタータが演奏される機会の少なかった頃に、大村先生が合唱団を創設され、以来、ご自身の日本語訳詞による教会カンタータ他を演奏し続け、大オーケストラと大合唱団による華々しいコンサートには目もくれず、バッハ一筋を貫き通してきたその気概において、一茶に一步も引けをとるものではありません。

まとめ

野尻湖合宿と演奏会の全体を、新約聖書の記事に例えてみると、イエスと弟子達(大村先生とバッハ合唱団)が聖地エルサレム(目白聖公会、世田谷中央教会)をしばし離れて、ガリラヤ湖畔(野尻湖畔)にて、「ご臨在の神様、どうぞこの世に平和をもたらし給え」と、ひたすら神に祈った(神山教会で神を賛美して、心を込めて歌った)ということにもなるのでしょうか。

私にとって、この合宿に初参加して得た最大の成果は、バッハ合唱団が長年にわたって、この土地の人々と国際村に集う外国人や共同運営を行う日本人と交わりを深めてきたこと、また、団員がバッハ音楽の真髄に触れて互に心を開き、心の交流をベースとする同志的合唱団を形成してきたこと、これらのことを身をもって体得し、皆様と一緒に心豊かにコラールを歌うことができたことでした。

大村先生、佐々木先生、皆様、本当にありがとうございました。

## 打上げパーティでのスピーチから

中澤富士子さん(後援会員、合宿全期間参加)

バッハを、あの神山教会で聴かせていただいて、こういう時に神を感じるのなあ、やっぱりバッハの音楽は、神がないとダメなんだなあ、実感いたしました。音楽ホールでのバッハは、そうすると何なのだろう、などと思いました。

皆さまが長い年月かけて、この合宿の練習時間にもまた長い時間かけて、ほんとに細かいことまで、一音一音に対してその絶対の音が出るまでくり返される。先生がいくら引っ張っても、団員の皆さまがそこまで高めていらっやらないと、仕上がらないのです。そういう充実した練習を見学させていただきました。

佐々木先生の独唱、ほんとにきれいでした!! どこをどういうふうで鍛えたら、あんなふうな声が人間の身体のかから出るようになるのだろうと、驚きました。

また、内山さんのピアノも。あんなに難しいのを弾きなされて、とびっくり。合唱の皆さまは、けっこうお休みのところもありますが、ピアノは始めから終わりまで、休みなく弾きつづけられて、お見事でした。

皆さま一つのことをやり遂げられるのに、これだけ精魂こめられて、それを40年以上も続けていらっやったのは、ほんとにすばらしいことだと思いました。



佐々木まり子さんの演奏に聴き入る聴衆(写真:松尾茂春)

佐々木まり子さん(アルト独唱)

このような機会を与えていただいて、感謝のほかありません。ある時期から、ライフワークとしてバッハのアルト・ソロカンタータを、いつでも歌えるように準備をしておこうと思うようになりました。原語だけでなく、日本語で勉強すれば、どんなに内容がふくらむことだろうと思って、大村先生にお話ししたら、もうさっそく、昨年2曲、今年2曲と、ここ野尻湖で連続して歌うプログラムをつくってくださいました。

今回のBWV54は、ちょっと「律法」的というか、こわい内容ですが、BWV169は、ほんとに神様へのラヴレターのよう、とてもすてきな歌で、すなおに自分の思いをのせて歌えたようです。

バッハの中でも珍しいくらいに、音も言葉もロマンティックで、オペラに比べても、またオラトリオや受難曲に比べても、むしろこの日常的なカンタータの中に、ありきたりのドラマ性を超えた、人間のドラマが歌われているよう

に思われます。それを今日の素朴な教会で歌いながら、さきほど中澤さんがおっしゃったように、ああやはり、この場所で歌われるべきなのだ、と、日本語の内容をかみしめていました。

この野尻湖には、40年も前から、毎年たのしみに待っていてくださるお客さまがたくさんいらして、合唱団の皆さんの地道な努力を受け入れてくださり、両方にとって祝福された場所となっています。バッハに対する愛情が一堂にあふれて、これに優るすばらしいものはないのではないのでしょうか。この喜びが、ますます大きくつづいてゆきますように。

内山亜希さん（ピアノ伴奏）

バッハ合唱団のピアノをお引き受けした最初のころは、とても大変でした。大村先生から感じるバッハの音楽の表現が心地よかったので、それを実際に耳に聞こえる形にするのに時間がかかっていましたが、ここ2、3年は、すこしずつ納得できる瞬間がふえてきたような気がします。

そんな時期に、佐々木先生のソロカンタータの伴奏をさせていただくことになり、自分がひとりで格闘するだけでなく、佐々木先生と合わせることで、壁とか、余計な障害が少しずつほぐれてくるような経験になりました。

合唱団の方の「ソロカンタータ」も、合唱も、ヴァラエティに富んだプログラムで良かったと思います。そこに、屈託のなさを、非常に感じたのです。皆さんが、屈託なく、バッハに近いところに飛び込んでいっているんだな、ということ、とても感じました。

.....

## ドイツ・ロマンチック街道を自転車で走破

阪根 隆司（後援会員、元団員）

1997年東京バッハ合唱団、1999年千里バッハ合唱団、とドイツ演奏旅行の回を重ねるごとに、その美しい景観の虜になった私は、いつしか阿部謹也の著したあの中世の箱庭のような街を巡るロマンチック街道を、自分の自転車で走ってみたいという夢を抱いていました。

一昨年定年を迎え、4年間務めた宝塚市の体育協会サイクリング部の会長を下ろして頂いた今年、何とかこの夢が実現する運びとなりました。7月8日から18日までの旅でしたが、自転車で走ったのはプルトツブルクからフュッセンまでの7日間354キロと、最後に立ち寄ったミュンヘン市街をポタリングした1日です。この間、休暇日数不足のためネルトリンゲンからアウグスブルク間とフュッセンからミュンヘンは電車を利用しました。



初日、ハールブルク城を右に見ながら、白地に緑色のロマンチック街道の自転車

道標識を見つけ、プルトツブルクの街を出る。「ここは自転車の方々どうぞ走ってくださいよ」と言わんばかりの素晴らしい自転車専用道が、美しい草原のなかを延々と続いています。もう嬉しくて胸がワクワクしてきました。あのオレンジ色の屋根と白壁の集落が丘の向こうにつぎつぎと現れる。タウバー川の静かで優しい清らかな流れが、われわれ



サイクラーズの心を癒してくれる。太陽の光がキラキラと緑の樹々の間を縫って輝く。広々とした大地には黄金色の麦畑、青々と茂るともろこし畑が、道端にはシロツメクサ、ポピー、アザミなど色とりどりの野花が、そしてところどころで牛や羊や山羊などがわれわれを迎えてくれました。

事前に検討していた観光地のほとんどは、やはりじっくり観る余裕は時間的に残されておらず、街に到着のときか、朝の散歩のときか、出発時にチラッと眺めながら通り過ぎるのが精一杯というところでした。

ランツベルクからは一転雄大なレヒ川を、そして最後はアルプスを眺めながら走ることになるのですが、私はシュタインガーデン南東に位置するヴィース教会だけは、すこし道草をしてもぜひ行って見たかった。緑の草原にぽつんと佇むロココの教会のなかは、期待に違わず豪華絢爛たる豊かな色彩と装飾のハーモニーの、夢のような世界が広がっていました。

最後のミュンヘンでは、マリーエン広場で昼食をとり、Neues Rathaus（新市庁舎）の仕掛け時計を見、民族衣装を着た音楽隊が Koeniglich Bayrischer Blasmusik（王室バイエルンの吹奏楽）を奏でながら行進するのを楽しみ、夜はホーフブレイハウスへ足を運んで、また好きなビールで打ち上げをしたのでした。

実は、この個人旅行の連れ合いは、私より10歳年下で、私はパーキンソン病、彼は心臓の病気持ちで、それぞれに英文の医師の診断書を用意してのツアーでした。でも現地の気候は日本に較べ5度から10度低く、湿度は約半分近くの45%位、こういう好条件に恵まれなかったら、今の私の体力ではこの計画も困難な挑戦に終わったことでしょう。

日独のサイクリング事情という点での比較で歴然とした違いは、あちらでは自転車が優遇されているということである。(1) 列車には自転車専用車両が設けてあり、折り畳まずそのまま、しかも無料で持ち込める。(2) 自転車専用道路があちこちに整備されており、標識も立てられている。(主要都市を結ぶ車道の側にも、できる限り自転車道が設けられている。)(3) 自転車も人と同じように、車より弱者という捉えかたが浸透しており、横断道では、車が先に来ていてもストップして自転車を先に通してくれる。クラクションなど、ほとんど聞いたことがありませんでした。それに応える乗手のマナーの良さも目につきました。かなりのお年よりの女性でも、曲るときはきちっと手を上げているのには感心したものです。

ドイツの丘には、ところどころで大きな風車を見かけました。町には、綺麗に色分けされた分別収集の廃棄ボックスがあり、無駄な電力を消費する自動販売機も、24時間営業のコンビニももちろん見かけません。あらゆる動物や動く機械のなかで、エネルギー効率が一番良いとされる自転車をないがしろにして、狭い国土に排気ガスを吐き出す高速道路がたくさんできる日本との間に、両国のエネルギー政策、環境対策の違いを垣間見た気がしました。(2005.8.8)



写真右、筆者

初め ありし / ごとく 今も  
後の 世まで / とこしなえに

(同上 第3節)

### 【解説】

初演：1730年秋か？ ライプツィヒ。

内容は、特定の聖書箇所によらない一般的な神讃美であり、宗教改革記念日、あるいは結婚式に用いられたかと思われるが、詳細は不明。

マルティン・リンカルト作のカラー「いざやもろびと神に感謝せよ」(訳詞では ああ 感謝せん 神に、Martin Rinckart „Nun danket alle Gott“ 1636. EG321) の全3節をテキストとした全詩節カラー・カンタータである。

独唱はソプラノとバスのみ。フルート2、オーボエ2、弦合奏と通奏低音という軽やかな編成。

#### 1. 合唱 [カラー第1節]

上記楽器編成のトゥッティで始まる、きびきびとした大規模な合唱。テノール・パートが散失しており、ブライトコプフ版(「バッハ・カンタータ 50 曲選」版)では、ベルンハルト・トートの編曲で補われている。新バッハ全集版では、トート版に基づいての改定がなされているが、今回は前者にしたがって演奏する。

合唱も、4声部で ああ 感謝せん 神に と、同時にトゥッティで始まり、下3声部がポリフォニックな変奏をつづける。その後ソプラノはカラー旋律を長い音符で提示する。

また同様に、第3行 奇しきみわざ 主はなしたもう をトゥッティ、下3声部のポリフォニックな変奏、ソプラノのカラー旋律提示、の順に歌う。それ以降は、始めのトゥッティなしで、今までの順序に各行をたどる。前奏・間奏のオーケストラは、さまざまに工夫された音型とパッセージで合唱を引き立て、最後は、4小節の声楽・器楽によるコーダで、きっぱりと終らせる。

#### 2. 二重唱 (ソプラノ・バス) [カラー第2節]

フルート、オーボエ、ヴァイオリン と弦合奏、通奏低音とで、4分の2拍子のリズムカルな前・間・後奏で、カノン風な2声の旋律を飾る。幸い、平和、恵み、救いなどの、おだやかな懇願を、タイをともなった長い音符で、うたえる。

#### 3. 合唱 [カラー第3節]

ふたたび1.と同様、フルート2、オーボエ2、弦合奏と通奏低音とで。速い8分の12拍子の、ジグ風な終曲。長いカラー旋律を、ソプラノがフレーズごとに、下3声に先がけて歌いだし、すぐそれを追って下3声部が、器楽と同じような、1小節に8分音符12個の、常動的なパッセージで従う。

おなじく神讃美を主題とする全詩節カラー・カンタータでも、前回の定期演奏会(第97回)でとりあげた、BWV129《ほめ讃えよ 主を》とBWV137《ほめよ主を 強き栄えの君を》では、トランペットとティンパニを加えた壮大なものとなったが、このカンタータでは、それをフルート、オーボエの、明るく柔らかな木管楽器と弦合奏とで、軽やかに表現しているのが特徴である。全3曲だけの、コンパクトな、心地よく親しみ深い作品である。 FND

### 次回定期演奏会 (2005年12月17日) 演奏曲目の紹介

#### カンタータ第192番《ああ 感謝せん 神に》

„Nun danket alle Gott“ BWV192  
訳詞 / 解説：大村恵美子

### 【訳詞】

#### 1. 合唱

ああ 感謝せん 神に / 心 わざもて  
ああ 奇しき みわざ / 主は 成したもう  
われら 幼く / ありし 日より  
今も のちも / 主は いますなり

(Martin Rinckart 1636 第1節)

#### 2. 二重唱 (ソプラノ・バス)

富める 神よ / われらに 賜え  
あふるる 幸と / とうとき 平和  
み恵もて / ささえたまえ  
悩みより / 救い出したまえ

(同上 第2節)

#### 3. 合唱

み栄え あれ / 父 子 み霊の 神に  
三つに まして / 一つなる 主に